

先端技術

ロボ再構築

キーパーソンに聞く

<6>

三月で、二〇〇二年に始まった経営計画の最初の二年間を終える。この間の研究改革の最大の成果は。

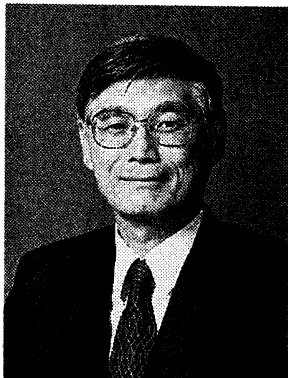
「第一には社外との研究開発連携が進んだことが挙げられる。自前主義からの脱却を掲げているが、二〇〇〇年度に七十―八十件だった社外との共同研究が、二〇〇二年には百五十件強に増えた。国立大学の法人化を控え、産学連携がやりやすくなったことなど環境面の追い風もあった。名古屋大学の篠原久典教授や東京大学の丸山茂夫

産学連携共同研究

の技術が融合し始めた。自分所属していない研究所での成果を評価するなどで、研究所を横断し取り組むプロジェクトが従来の一、二テーマから七テーマ程度に増えた。研究プロジェクトの規模も大きくなりスピードも増した。

規模も大きくなりスピードも増した。大学と包括的な提携契約を結ばないのか。「包括提携はしない方針だ。得意とする研究分野の特徴は各大学ごとに異なる。産学連携で研究情報収集作業が必要にならなければならない。研究者が技術情報などを容易に検索できるようにシステムを開発中だ。社内にも各研究所とが重要だ。当社に欠け

テーマ別、成果早く



東レ専務取締役 小林 弘明氏

活用した商品が出る時期待っている。「三―四年以内に研究者を百人程度に倍増させる。そのうち三割は社外から採用したい。経験者の採用は社内の研究の活性化につながる。バイオ

た先端融合研究所(神奈川県鎌倉市)の効果は。「社内外にバイオテクノロジーやナノテクノロジー(超微細技術)の研究を本気で手掛けるということを明確にできた。研究者も同分野に集中して取り組むことができるようになったほか、経験者を中途採用したことで予想以上に研究が進んだ。

視点

過去の成長は人工皮革や炭素繊維、中空糸膜やインターフェロン製剤などが大きな役割を果たしてきた。繊維の東レから「先端材料の東レ」に転換し、再び成長軌道に乗せるには、研究改革の成果が欠かせないだろう。(岩野孝祐)

研究改革の実

成長へ不可欠 二〇〇一年度に落ち込んだ業績がここまで急回復したのは、事業構造や営業体制の改革などがけん引した側面が強い。

葉も理解し返答

早大「対話型ロボ」開発

早稲田大学の小林哲則教授らは、人が話すあいまいな言葉を肯定的か否定的な意味なのか理解できるロボ

人の声の波形と

ットは否定的と判断し、別のメニューを紹介する。正確に意思を理解できる精度は七八割だといふ。従来のロボットは人間が「はい」「いいえ」で答える方式だった。新型ロボットにより、人間同士の話により近づいていく仕組みになっている。今回のロボットでは、人間が登録してない言葉を使うと、「それってどういう意味」と聞き返す。登録した言葉を人間が使うまで繰り返すし、ロボット自身が理解できる形に